

琉球におけるロシア人たち（一八五四年二月一日―九日）⁽¹⁾

ワジム・クリモフ

多くの場合、これまで、研究者たちは、短期間とはいえロシア人たちが沖縄島、当時の言葉では大リュウウチユウ島に滞在したことがあることにほとんど注意を払っていなかった。キリール・エヴゲーニエヴィチ・チエレフコ⁽²⁾「長くロシア外務省に勤めた日露関係史の専門家」ですら一言も言及がない。エスフィリ・ヤコヴレヴナ・ファインベルグは、その研究書の半頁をこの問題に対する回答に割いているが、沖縄島にアメリカ艦隊が逗留したこと、マシュー・ケルブレイト⁽³⁾「カルブレイス」・ペリー（一七九四―一八五八）が「琉球島を合衆国政府の支配下に置く」と宣言したこと⁽⁴⁾のみにすべての注意が向けられている。海外では一番有名な研究者、ジョージ・レンセンがこのテーマに当てているのは一頁以下である⁽⁵⁾。遣日使節エヴファイミー・ヴァシーリエヴィチ・プチャーチン伯（一八〇三―一八九九）⁽⁶⁾はといえば、印刷全紙八二枚分「印刷全紙」は一枚が二六頁からなるからなる長大な報告書の中で、沖縄島滞在にふれた部分はわずか一頁にも満たず、しかも概略の記述にとどまっている。数ヶ月前、ウラジオストクで、ロシア海軍軍人たちが沖縄島にいたことを明らかにしているE・V・プストヴォイの研究書が出版された。同書の中で初めて、島の現地の支配者の命令やキリスト教宣教師ベツテリゲイム⁽⁷⁾【ベツテルハイムBernard Jean Bettelheim（一八一七―一八七〇）英国に帰化し、英国海軍琉球伝道協会から那覇に派遣されたユダヤ人宣教師。以下はすべてベツテルハイムと表記】の日記が言及され、ロシア語で引用された⁽⁸⁾。

本論文は、ロシア海軍軍人たちの沖縄島滞在を発見された史料や学術

文献に基づき、時系列に描こうとする試みである。

本稿執筆にあたっては、ロシア海軍軍人たちの証言、なによりもイヴァン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャロフ（一八一二―一八九一）の作品『フリゲート艦バルラダ号』、コンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエツト（一八一九―一八九九）の手帳第七号、沖縄島の権力者の命令文書、ベツテルハイムの日記等が基本的史料となる。ロシア作家の作品は日本でよく知られており、いくつかの研究論文が既に世に出ているとしても⁽⁹⁾、ポシエツトの手帳が研究対象になったことは初めてである。

名譽のために指摘しなくてはならないが、ロシアの文書館員たちにとつては、もちろん、この手帳の存在は周知のことであり、何人かは既に通読しているが、本稿著者が調べた限りでは、現在においても、書簡を出典として参照、研究した学術書は出されていない。それには、客観的な原因がいくつかある。

第一に、ポシエツトの手帳は保存状態がよいとはいえない。鉛筆で書かれており、多くの箇所が本文に欠損がある。第二に、ロシア語だけではなく、オランダ語、英語、ドイツ語、フランス語で書かれている。例えば、下田条約の本文作成に当たったの困難さや苦勞、日本側代表との交渉に関しては、何頁にもわたってオランダ語で書かれている。それゆえ、研究者は、これらの言語に対してたとえ卓越した能力ではないとしても、少なくとも辞書を引ける程度の能力は必要となる。第三に、ポシエツトはこの手帳を自分のため、心覚えに書いており、忘れないため

の短いメモであり、誰か他人の目を意識したものではない。またあるテーマで統一してまとめた文章ではない。そのために、この書付を理解し、正確に解釈するためには、他の世に知られた典拠によって、確定しなくてはならない。第四に、手帳に欠損部分があるという以外に、書き方が雑で、判読困難な筆跡の省略された言葉や術語がたくさんある。

手帳には長い時間経過の間に画像の明確さが失われた、あるいは、失われつつある、たぐさんのスケッチがあり、海岸線、建築物、民族学的なディテールの数々、人々の姿、小型船や帆船の形、描き手が滞在することのできた建物の部屋の配置等が描かれている。

これらの手帳はサンクト・ペテルブルグのロシア国立海軍文書館に保管されている。ポシエットの手帳は、堅い皮の表紙が付き、中の白い頁は今日の製図用紙に似た硬いアート紙からできている。筆記には普通の鉛筆が使われており、手帳の何枚かの頁では、色が褪め、所々、全く消えてしまっているところもある。手帳はあまり大きくはないが、それぞれの革表紙の色、大きさは異なっている。恐らくポシエットは、必要に応じていろいろな時期に手帳を購入したのであろう。

手帳第七号（「第七号」の文字は黒いインクで書かれている）一八五四年（年は青色の鉛筆で書かれている）は、沖縄島の言及がある。表紙の内側には一八五三年の一枚物のカレンダーが付いている。この手帳の大きさは、長さ一〇・四センチ、幅七センチ、厚さ一・五センチ。紙二枚目の裏【前から四頁め】には、漢字で地名が書きとめられている。漢字で那覇、首里、泊村と書かれ、それらと並んで、ロシア文字でナバ（ナハではなく）と書かれている。首里には全く発音は付されておらず、宮中支配者の邸宅のあるところとある。泊村は「とまりむら」と読むのであろう。（ポシエットが二番目の漢字に記した読みには「むら」がはっきりと見える）。同様にロシア文字で「ゴカノビデ」（二応、正しく判読

しているとしてだが）とあり、「こんにちは」の意味の土地の挨拶であると書かれている。

本稿執筆に当たってはこれ以外に、「海軍雑誌」【Морской Сборник】に掲載された「日本及び中国へ向けた我が国海軍艦隊航海に関する侍従武官長 E・V・プチャーチン伯の皇帝陛下宛の報告書」を史料として参照している。

もし日本文学の中でゴンチャロフを扱った論文がいくつかあったとしても、ポシエットに対しては遥かに注目が少ない。だがポシエットは実際には単独対象として格別研究対象に値する。

コンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエット（一八一九—一八九九）は日本に三回渡航する。最初は一八五二—一八五四年、少佐【капитан-лейтенант】の階級で、フリゲート艦パルラダ号に、後にディアナ号に、プチャーチン外交使節団の一員として乗艦（一八五四年二月一〇日には中佐【капитан II ранга】に昇進）。二回目は一八五六年、コルベット艦オリブツァ号で下田条約の批准書を持って江戸に到着した。二度目の日本来航時、日本側にスクーター帆船戸田号が引き渡された。三回目は、フリゲート艦スヴェトラナ号、コルベット艦ボガティリ号、クリツパー艦アプレク号の三隻からなる海軍艦隊の一員として、クロンシュタットから北米海岸へ向けた航海を行い、その後、特別実演艦隊の長官として日本と中国へ向かう。（一八五五年一月三〇日大佐【капитан I ранга】、一八六一年四月二三日少将【контр-адмирал】、一八六八年一月一日中将【вице-адмирал】）。彼は既に侍従武官長になっていたし、海軍中将という高い地位にまで昇った。三回目、最後の日本訪問は一八七三年。アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公殿下に随行して来たのであった。その間、日本は大変変化を遂げていた。

「大公に随行して、彼「ポシエット」【「」内はクリモフ。以下同様】

は鉄道で横浜から江戸に向かった。帝【Mikado ミカド】自身と皇后にまで拝謁したし、大きな閲兵式にも参加し、日本の蒸気艦隊の演習も見た。しかもそのうちの一隻は装甲フリゲート艦だったのだ。日本によってこのような比較的短期間で成し遂げられた成功は計り知れなく、疑いなく、この成功がロシアの偉大なる改革者ピョートル大帝にも比較されるほど優れた現在の皇帝【明治天皇】の指揮の下さらに著しく進展するだろう⁽¹⁰⁾】。

ポシエツトはロシアの繁栄に多大なる貢献をした古くから続く貴族階級に属している。祖先はフランス人で、ポシエツト・デ・ロシイと名乗り、プロテスタントであった。ルイ十四世がナントの勅令を拒否した時⁽¹¹⁾、居住にもっと安全な場所を探さなくてはならず、姓をポシエツトとして、ロシアに移住した。フランスに残った子孫はロシイという姓で知られている。そのようなわけで、ピョートル大帝の治世時、ピョートル・ポシエツト（？—一七二〇）はアストラハンの海軍省長官であり、カスピ海用の船を建造した。イヴァン・ポシエツトは一七二三年皇帝の命令で、アストラハンでどう栽培と高品質のワイン製造に従事した。

ニコライ・ペトロヴィチ・ポシエツト（？—一八三二）はコンスタンチン・ニコラエヴィチ【本稿主人公であるポシエツト】の父で、海軍幼年学校【Морской корпус】で教育を受け、海軍士官になり、バルト海艦隊勤務、少佐にまで昇進した。父が死去した時、コンスタンチン・ニコラエヴィチは一一歳で、まだ海軍幼年学校に入ったばかりであった。母の後見のもとには、彼の他にも姉妹が三人いた。家族は他界した父の年金のみで生活できた。コンスタンチン・ニコラエヴィチ・【ポシエツトは海軍幼年学校を優秀な成績で卒業し、教育を続けるために、士官コースに残った。指摘しなくてはならないことは、教育を続けられる士官コースに選ばれるのは、幼年学校卒業予定者のうちわずか六—八人だとい

うことである。後に、士官コースは、海軍アカデミーに改組された⁽¹²⁾。コンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエツトは優れた教育を受けた。有名なアカデミー学者であるブニャノフスキー、オストログラツキー、あるいは、レンツェ、ブラチエフ、ゼリョノイその他の優秀な専門家の下で教育を受けたのだ。

一八四三年、年若い中尉は有名な航海者ラザレフの弟子であるプチャーチン少将の知遇を受けた。プチャーチンは海軍省軍令部におり、さまざまな分野の科学的知識で極めて広範囲な知見を要求するメンシニコフ公爵【Князь Меншиков】のさまざまな要望を実行していた。高度に教育された助手の必要が生じた。そして、それに該当したのが、甚大な仕事能力で際立っていたコンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエツトであった。計算してみると、五二年間の勤務で、休暇を取ったのはたった九回、全部でたった二七週間ということになる⁽¹³⁾。言い換えれば、毎年休んだのは三、四日ということだ。

日本沿岸に向かった艦隊の旗艦はフリゲート艦パララダ号⁽¹⁴⁾、艦長に任命されたのは、侍従武官、イヴァン・セミョーノヴィチ・ウニコフスキー（ウニコフスキー）少佐（一八二二—一八八六）。スクリュー・スクーター艦ヴォストーク号は三〇馬力の強力装備を備え、イギリスのブリストルで三三七五ポンドで購入され、五三八〇ポンドで軍艦に改装されたもので、艦長はボイン・アンドレヴィチ・リムスキー・コルサコフ大尉（一八二二—一八七二）。七月二六日小笠原諸島のひとつペーリ島【父鳥】のロイド港【二見港】で艦隊にコルベット艦オリブツァ号（艦長ニコライ・ニコラエヴィチ・ナジイーモフ少佐（一八二二—一八六七）、露米会社船メニシコフ公爵号【Князь Меншиков】（艦長イヴァン・ヴァシリーエヴィチ・フルゲリム大尉（一八二二—一九〇九））が合流した。八月四日四隻からなる艦隊は、ロイド港をあとにし、長崎に向かい、八

月九日長崎投錨地に投錨した。

日本人と交流中、プチャーチンは皇帝ニコライ一世の命令、ロシア外務省の訓令を遵守した。提督は「皇帝陛下宛報告書」の中で、「今は亡き皇帝陛下のご意志と外務省から与えられた訓令を遵守して、この民族との接触中の行動規範を私は自分に対し想定したが、その根本に置かれたのは、穏やかで友好的な態度で臨むこと、我が国および我が職務の尊厳に反しない限り、寛大に彼らの国法や習慣を遵奉すること、自身に課せられた任務に関する交渉において堅忍不拔を貫くことであった。日本滞在の最後の日まで、この規範を遵守し、陛下のご賢明なるご命令に従い、決して日本政府との間の善隣の合意を損ねることなく、強固な基盤の上に、今後長きに亘るべきものとしてそれを確立し、望まれた目的を達成したことは私にとって幸いである」⁽¹⁵⁾。

長崎での最初の交渉が終わった後、プチャーチンは食料を補充しなくてはならなかった。

冬季はロシア領土の「タタール海峡とオホーツク海の不毛な海岸」では調達が困難であった⁽¹⁶⁾。故に提督は、艦隊の必要に対してのロシア政府の信用状を送付してあるマニラに向かった。途中、琉球諸島の主要な島沖繩を視察することにする。当時ロシアでは一統きの琉球諸島はリケイ諸島という名で呼ばれ、沖繩島はリュウチュウ島、あるいは、大リュウチュウ島と呼ばれていた(ポシエツトは手帳の中でルウチュウと呼んでいる)。後に二〇世紀の初め研究者 P・Yu・シユミットは日本の自然を記述し、リュウキウ (Liu-kiu) 諸島と名付け、年平均気温が二一・四度と指摘している⁽¹⁸⁾。しかし、同じ書物の中で「日本の歴史」^{【«Исторический очерк Японии»】}という論文の著者はフォルモサ島(台湾)での殺害事件に触れ、「海難に遭った何人かの RE-KI 諸島から来た航海者たち」としている⁽¹⁹⁾。換言すると一九〇四年日本に関する論集が出

版された時に「リュウキウ」というこの諸島に対する今日の言い方がロシア語でも定着した。I・A・ゴンチャロフはこのことに関して、「リケイ諸島」とはいかなるものであるか。我が国の古い地理書では、「リュウキエウ」、外国人たちは「リュウーチュウ」(Loo-Choo)、住民はというと『ドゥウーチュウ』と言っている⁽²⁰⁾と書いている。

一八五四年一月二四日(露曆)フリゲート艦パルラダ号、カムチャツカ小艦隊所属コルベット艦オリブツァ号、露米会社所属輸送船メンシコフ号は長崎をあとにし、四五〇マイル南にある琉球諸島に向かった。スクーナー艦ヴォストーク号(艦長はヴォイン・アンドレヴィチ・リムスキー)コルサコフ大尉(一八二二—一八七一)は、プチャーチン提督の命令によりヨーロッパの情報収集のため上海に向かい、その後、琉球諸島で他の艦船に合流することになっていた。ゴンチャロフは、出発の前の別れの席で「筒井は提督『プチャーチン』、ポシエツト、私『ゴンチャロフ』に、大量の箱を送り届けてきた。奉行たちは全員のために家禽と青物を届けてくれた」と記している⁽²¹⁾。琉球諸島での滞在についてプチャーチンは非常に短く「皇帝陛下宛の報告書」に記している。とりわけ言及していることは、二月一日三隻の艦船からなる全艦隊は大琉球島に到着、ナパキアング投錨地に投錨し、二月五日、スクーナー艦ヴォストーク号が合流したことである。コルベット艦オリブツァ号、輸送船メンシコフ号が沖繩島に到着したのは、フリゲート艦の到着より早い。一月二九日(二月九日)夕刻 [в сумерках 本来ロシア語ではこの語は払暁も夕刻も指せ、他の史料がなくこれだけではどちらであるかは不明]、パルラダ号は島に接近、しかし「水脈の通過に失敗、投錨…、珊瑚礁はものすごい高さ⁽²³⁾と艦船にとり実際の脅威であることを述べている。内海の投錨地は二つ入り口がある。「ひとつは狭く北から、もうひとつはさらに狭く南から。フリゲート艦にとって進入は、四輪箱馬車が狭い門

(15) 琉球におけるロシア人たち (1854年2月1日—9日) (クリモフ)

を入ると同じように、暗礁に接触しないよう、確実なものでなくてはならない。提督は夕闇の迫りだす中【в наступивших сумерках】危険を犯すことをよしとせず、夜明け【рассвет】まで待つことを決めた。だが、深夜【в полночь】、大洋から海岸に向かって風が吹き始め、「主たる大きな島の目に見えるすべての空間を曲線状に帯のように取り巻いている珊瑚礁」にぶつかって難破する脅威が現実のものとなった。⁽²⁴⁾一月三十一日（二月二日）フリゲート艦は北側の水脈を通過、夕方【вечером】「水深一二サーゼンに投錨⁽²⁵⁾、海底は細かい砂質」⁽²⁶⁾。

投錨地に最初に入ったロシア艦船はコルベット艦オリブツァ号である。最初、キリスト教官教師ベッテルハイムはペリー艦隊のアメリカ艦が到着したと思った。しかし、望遠鏡で到着したコルベット艦を見て、その旗からロシア艦だと確信した。ベッテルハイムはただちに現地の役人に通報した。そして彼らはロシアという国が存在することを初めて知った。ベッテルハイムは、交戦状態にある英仏両国とロシアが緊張関係にあることを心配し、自分の住まいの安全を保とうとして、家の上に米国旗を掲げた。約十五人の指揮下の水兵とともにペリーが沖繩島に残した二人の士官の一人、ヴァンダリア号のローレンス・レンデルは、宣教師の例に従い、石炭倉庫の上に米国旗を掲げた。レンデルはその時ペリーが彼に残した二つの文書をベッテルハイムに見せたが、その文書の中には琉球列島は合衆国の施政下であると宣言されていた。⁽²⁷⁾

当地の政権は混乱に陥った。露暦一月二八日（西暦二月九日）、首都、すなわち琉球諸島の宮中支配者の邸宅がある首里の域内にロシア人が侵入することを阻止するためにはどのような方策があるか調査に入った。ロシア人に対して外交的監視がなされることが決定された。この日、おそらく、琉球国現国王・尚泰（在位一八四八—一八七九）の祖母、今は亡き国王尚古ウ【「さんずい」に「景」に「頁」、あるいは「濠」に「頁」

（一七八七—一八三四、在位一八〇四—一八三四）の妻が死去したのだろう。

当地の権力は次の内容の触れ書を出した。

「一、必要に応じて、女王【королевская особа】の病因、崩御や葬儀の日時、喪の諸事に関し、外国人に対し正確で誠実な説明がなされる。二、ベッテルハイムに女王【королева】の埋葬の正確な場所を通知しない。喪の諸事は五〇日間続くだけ伝える」⁽²⁸⁾。

ゴンチャロフは海から見た琉球諸島の姿を素描の淡い色の輪郭になぞらえている。ポシェットが手帳に描いた海岸のスケッチは、おそらく、作家【ゴンチャロフ】の次の言葉を最も良い形で具現化している。「まず私の目の前に琉球諸島が現われた。陸地の塊が、青でもなく、灰色でもなく、ところどころ、こぶのような塊となり、ところによっては帯のように水平線に延びている。我々は海岸から五—六マイル離れ、珊瑚礁の暗礁脈がある」⁽²⁹⁾。

ナパキヤング⁽³⁰⁾、島の行政の中央、那覇で、ロシア海軍軍人たちが会ったのは、プチャーチン到着の文字通り二日前に島に立ち寄ったペリー米艦隊の士官一人と水兵数人であった。その士官により提示された文書から以下ことが明らかになった。「琉球諸島は合衆国の支配下に入った。その理由は日本政府が幾つかの要求に答えないことにある。その日本政府の保護下にこの諸島はあり、日本政府に対して貢納されている」⁽³¹⁾。

土地の権力の公式代表がロシア人に断言したことは、彼らは日本に従属していない、それどころか、中国に若干貢納しているということである。一方、プロテスタントの宣教師は、琉球全諸島は、九州島の南部にいる薩摩一族の大名に隷属していると断言している。薩摩一族の長は諸島の支配者となる後継者の継承権を十五歳で成人した際に保証している。

『海軍雜誌』【Морской сборник】第二部では、公式論文と公式ニュー

スが刊行されているが、そこではロシア艦船の沖縄島到着が短く報道されている。「侍従武官長プチャーチンの伝えるところによると、琉球諸島は自分たちが占領したとアメリカ人により宣言されているが、その原因となったのは、アメリカ人の要求の一部を日本人が満たしていないことである。現在ナパキアング港は、ペリー提督艦隊の合流地点に予定され、アメリカ人の病院、石炭やその他、備蓄品の倉庫があり、合衆国旗が翻っている。蒸気艦三隻、コルベット艦三隻から成るアメリカ艦隊は我が艦隊が到着する二日前にナパキアングを発ち、江戸に向かった」。

ポシエットの指摘によると、一八三七年、最初のヨーロッパ人がナパキアングに来航し、そこを視察した。コンスタンチン・ポシエットが自己に課した課題から判断すると、彼の興味を引いたのは島の名前、地名の語源（このことは地名が彼にとって歴史的な資料であり、それに大きな意味をおいていたことを意味する）、そして、「宮中権力者の邸宅」であった。

一月二十九日（二月九日）フリゲート艦は夕刻【B. Omepeka】沖縄島の外海の投錨地で投錨。艦船にとって大きな危険となるのは「珊瑚礁」である。次の日危険のない通航路を探し、夕方には【K. Bepcy】北側の水脈から内海の投錨地に入り、「水深一二サージェンに投錨、海底は細かい砂質」⁽³⁵⁾。一五分後、ポシエットは、彼のメモによれば、提督とともに上陸⁽³⁶⁾。埠頭には数人の琉球人がいた。「一部の者は、寡婦の女王の喪に服して帽子を頭に着用していなかった」。埠頭には多分米国旗が揚がっていたはずである。この点について、ポシエットは手帳の中で短く記している。「米国旗。素晴らしい植物」⁽³⁷⁾。

二月一日（二三日）（ポシエットが手帳の中で使った露曆に加えて西曆を追記する。読者が露曆と西曆との換算をする労を省くためである）。当直の任務に携わらない乗組員は、上陸し、徒歩で散歩したりすること

が許可された。ロシア海軍軍人たちは長崎に滞在中、自由に上陸したり、陸上を散歩したりすることはできなかった。プチャーチン提督は次のように記している。「長崎投錨地にいる間は長期にわたって、上陸することができなかつたので、我々は喜んで花が咲き乱れ耕作された島の谷を歩きまわった。島に際立って特徴的なことは、すばらしく穏やかな気候と実り豊かさ、平和的で穏和な住民が住んでいることで、彼らは日本人や朝鮮人と顔の特徴がかなり似通っている」⁽³⁸⁾。特にポシエットはゴンチャロフ、ゴシケーヴィチ、司祭アバクウムとともに島を散歩して歩いた。皆は首都に向かったが、その地のことはロシア人は様々な名で呼んでいる。「チュイ、チュジ（Tshudi、Tshueは中国風にシヨウリーといい、中心地だが、地元民はシュリと呼んでいる）⁽³⁹⁾。作家ゴンチャロフは、首都への道をパルゴロヴォへの道と比べている」⁽⁴⁰⁾。「パルゴロヴォへの道、あれと同じ大きな舗装道路……。ただしここでは、丸石ではなく、珊瑚で舗装されている。珊瑚はどこどころ靴底を通して感じられるほど尖っている。琉球人がどうやってこの道を裸足で歩いているのか理解に苦しむ。だが、ところどころ珊瑚は完全に磨耗しており、その上では、寄木細工の床の上を歩くように、足がすべる」⁽⁴¹⁾。

ついにロシア人旅行者たちは、宮殿に通じる大通りに出た。この瞬間をゴンチャロフは次のように記している。

「ついに着いた。『おお！本当に立派な首都だ！』中国風の破風とやはり中国風の表札のついた広い門を見ればこう思うだろう。『あそこには何と書いてあるのですか。読んでください』とゴシケーヴィチに尋ねた。『見えます。高いので』と彼は答えた。我々は、ゴシケーヴィチが近眼であることを忘れていた。我々は門を通り過ぎた。前には尽きることのない広い通り、あるいは、今までと同じ道が延びているのだが、今までと違って、大きな珊瑚で舗装されず、街道のように、小さな石が敷き

詰められており、両側は、すばらしい樹木の植えられた庭園あるいは公園が続いている。石垣からは、ところどころ、赤い瓦の屋根が見える。誰にも会わなかったし、姿すら見せなかった。皆町から出払ってしまったのかのようであった。だが、何人か会った人間は一人は医師か僧侶のようで、頭を剃り、粗い麻のゆったりした上着を着ており、急いで傍を通り過ぎた。我々がことさら見つめると、彼らは最大限の従順さ、あるいは、もっと言えばむしろ、恐れを表わし、ほとんど地面に付くほど最敬礼をしながらも先を急いだ。いくつかの門には人々が姿を見せ隠れし、隙間から覗いたりしていた。この通りには、最上流の、あるいは、裕福な階級の人々が住んでいるようであった。それらの家々には広い石畳が続いていた。我々は大股でさらに先へ歩いて行った。通りが左に折れたところで、宮殿の前に出た。それは石の大きな塀のある城砦だった。高さはおよそ四サージェン、ところどころ、苔や蔓植物に覆われている。幅が広い石段は、荒削りな造りだが、がっしりと板が建て付けられた高々とした玄関に導いてくれる。門の両側には、台座の上に、スフィンクスによく似た、珊瑚石の動物が鎮座している。どこにも生命の兆しがない。すべてはまるで魔法のおとぎ話の中のように石になったようだし、私たちは遠い遠い国からまるで火の鳥を手に入れるためにやってきたようだ。門は、片側に、長崎で見た衛兵所のような木の回廊がしつらえてある。回廊の中では琉球人が莫座に正座している。たぶん王宮の召使であろう。やはり彼らも身じろぎもしない。まるで石で作られたみたいだ。我々は休憩のためちよつと座った。その後、ガジュマルやヒマラヤスギが植え込まれ、木々の間には小道が八方にくねっている高台の坂が続く山を下った⁽⁴²⁾。

ポシェットは、宮殿まで広い素晴らしい通りが続いており、彼らは「首都に入って、宮殿に着くまで…全く障害物にも出くわさなかった」と短⁽⁴³⁾

く記している。ロシア人たちは、邸宅の中に入ろうとはしなかった。ロシア人たちは平民が住んでいる市街地部分にも行ってみた。ポシェットは短いメモを残している。「街の汚い部分。貧困。鍛冶屋…。湖岸の植生。「美しい」光景。家の中の清潔さ。僧侶⁽⁴⁴⁾」。散歩の後、フリゲート艦に戻ると「ナパキヤ【シ】グの領主から派遣された琉球人たちがおり、彼らは食料(豚二匹、雄山羊二匹、雌鶏十羽、卵百個、大根二束…)を贈り物として持ってきていた⁽⁴⁵⁾」。

土地の権力者の家の家政文書【*козаіцтвенніе документи*】の中に保存されている送り状(覚え)に、フリゲート艦パルラダ号より先に沖繩島に到着したコルベット艦オリブツァ号、輸送船メンシコフ公爵号に対して提供された食料が書き留められている。「それぞれの艦に、豚二匹、雄山羊二匹、雌鶏十羽、卵百個、唐芋八十斤、大根五十斤⁽⁴⁶⁾」。おそらく土地の権力者により定められたであろう受け渡し命令書によると、フリゲート艦に四日後には同じ量の同じ食料が運び込まれた。「豚二匹、雄山羊二匹、雌鶏十羽、鶏卵百個、唐芋八十斤、大根五十斤⁽⁴⁸⁾」。ゴンチャロフは、散歩から帰るとフリゲート艦の舷側に「黒い縞の白い長着、素足にサンダル履きの長いあごひげの三人の老人がいた。彼らは来琉の祝いを述べるためにナパの領主【*Нанаіккія Юсепһатоп*】のところから来た者たちで、贈り物として野菜、卵、雌鶏を運んできたのである」とより詳細に言及している⁽⁴⁹⁾。

ポシェットは遥かに正確に運び込まれた贈り物を挙げている。領主の代表たちは茶を馳走された。プチャーチン提督はフリゲート艦上に領主を招待したい旨希望を述べた。通詞のナゴダを通して約束がされた。ポシェットは何語で話し合いが行われたか記していない。ゴンチャロフ自身も代表の一人が「自由にゴシケーヴィチと中国語の筆談で話をしていった。もう一人は英語で話していたが、ほんの少しだった⁽⁴⁷⁾」。ここでゴンチャ

ロフはさらに次のように書くことを我慢できなかつた。「だが、これは我々ヨーロッパの言語が、彼らにとつては精神的にも形態的にも異質なものであることを思い起こせば上出来である。これらの幼子たちを「合衆国人が保護した」のはそれほど前ではないが、既になんだかんだと教えこんでいる」⁽⁵⁰⁾。この教行に作家の東洋の民族に対するヨーロッパ中心の視点、東洋人はヨーロッパ人に比べて先天的に低いという見方が現れている。

同じ日に、ペリー提督の艦隊からの少数部隊の指揮官であるアメリカ人士官は、目を通すようにとプチャーチンに二つの文書を渡した。ペリー艦隊は中国から江戸に向かう途上であつたロシア艦隊到着の二日前に島から出発している。文書のひとつには、「合衆国の代表者たるペリーは当海域において琉球島はアメリカ人により占領されたこと（傍線はポシエット。クリモフ注）を宣言する」とあり、「合衆国が日本に対して持つ要求」が満たされないことに対する報復である⁽⁵¹⁾とし、当地に來航する他の列強諸国の艦船に対し、当該事項を念頭において欲しいと求めている。もうひとつの文書で司令官はアメリカ人が建築した建造物に慎重に対処するよう要請している。「ペリーは草も木も、アメリカ人が建てた…家屋も損なうことを禁止するよう求めている」⁽⁵²⁾。

ゴンチャロフはこのことを次のように述べている。「彼らは、我々が到着した二日前に当地を出発したが、具合の悪い水兵たちと二人の士官、そして彼らとともに文書を残し、その中でアメリカ人たちは、自分たちは日本人のくびきに異議を持つており、それに対抗しこれらの島々を米国の保護下に置いたことを他国の艦船に通告し、ゆえに、他国は手出しをしないしてほしいと要請した。米国人たちは石炭保存庫まで作り、その後、…ペリー提督は日本に向けて出発した」⁽⁵³⁾。

他の箇所で作家は島の美しさを描写しつつ、現代の読者にとっては全

く思いもかけず、現代流の言葉で言えば、既に出来上がっている現実、現実の歴史、近隣諸国、すなわち中国と日本との歴史的に形成された関係を軽視し、島を合衆国の法制下におくことを志向するペリーの行為を是認している。とりわけゴンチャロフは「…北緯二六度のところにこれから祝福された島があるのである。これらを保護下に置かないだなんて言うのか？合衆国人たちは完全に正しい、彼らの側から見れば」と言っている⁽⁵⁴⁾。

二月二（一四）日

提督との昼食に英国国教会の宣教師が招かれた。しかしながらプチャーチンは報告書の中で、プロテスタントの宣教師としている。おそらくこれは、間違いなく英国国教会の聖職者のことと思われる。昼食の一時間前に、五百人の中国人移民を乗せてサンフランシスコに向かう途中のイギリス商船が到着した。ポシエットは、この船で現在の宣教師と交替するために別の宣教師がやって来た、と記している。昼食の席で現在の宣教師は、四名の琉球人をキリスト教に帰依させることができた、また、日本語・中国語辞典と日本語・英語辞典を編纂し、『四人の福音伝道者』⁽⁵⁵⁾【四福音書】と『ローマ人への手紙』⁽⁵⁶⁾を翻訳した、と語った。彼はこれら全てを上海で印刷する準備を進めており、すでに自分の家族を同地に遣つたとのことである。離任する宣教師の言うところでは、琉球人はキリスト教聖職者の教えに喜んで従いキリスト教を受け入れていきたいと思つているが、日本人に従属している政府がそれを阻止しているとのことである。

ゴンチャロフは宣教師との予期せぬ出会いについて次のように記している。「…二月二日、我々が岸に上がる準備を終えようとしたまさにその時に、イギリスの宣教師ベッテルハイムが我々のところに現れた。彼

はやせ気味で、ユダヤ人の風貌をし、顔色は青白いというよりは色が褪せたという感じで、爪が鳥の爪に少し似ており、大変な饒舌家であった。彼には魅力的なところは全くなく、また、彼の話、その口調、内容、挨拶も何となく素っ気なく、打ち解けず、好感を持るところがない。彼は八年間琉球に住んでいるが、聖書を琉球語と日本語で出版するために五月にイギリスに出発することになっている。妻と子供たちはすでに中国に遣って、自身は、自分を連れて行くことを彼に約束したペリーと共に、別の宣教師が交替にやって来次第、同じく中国に向かう予定である。琉球に八年間というのは、真にキリスト教的偉業と言わざるをえない！彼は英語、ドイツ語を話すが、フランス語はおよそ下手だった⁽⁵⁷⁾。

宣教師の言ったことをポシエツトが書き留めたところに従えば、琉球の宮中支配者は、「日本の公で、本当に小さな子供「一二歳、クリモフ注」であるため「一五歳になるまで」摂政の下にある。琉球諸島は薩摩藩の所屬とみなされている。中国への年貢はすでに払っていない。日本への年貢は米に換算して年間四億七千二百万フント「フントはロシアの重量単位」⁽⁵⁸⁾と読んだのはクリモフ⁽⁵⁹⁾相当になり、様々な品物で支払われている。日本からやって来る船は年間五〇隻に上り、三月、四月、五月、六月に集中している⁽⁶⁰⁾」。

一方ゴンチャロフが伝えるところによれば、「年貢は現物で貢納され、日本の米をも上回る最上品種の米、および煙草、竜涎香、バナナ「芭蕉。以下同様」の繊維から作った布、酒である。酒は最上のものとされ、日本人は自分たちの米を酒の醸造に最適な当地の米と交換している⁽⁶¹⁾」。

作家ゴンチャロフは、地元の宣教師から聞いたところとして、年貢は金額に換算して二十万ルーブルに上っており、そのことは島の土地が肥沃であることを間接的に示すものと記している。年少の王の母【祖母】は、夫亡き後の女王で年若い息子【孫】の摂政役を務めていたが、ロシ

ア艦隊が来る少し前に死去した。琉球人たちは五〇日間喪に服していたが、その間多くの者は草で出来た白い長着をまとっていた。ゴンチャロフは「白は東洋では裳の色である⁽⁶²⁾」と記している。年少の王はまるで捕虜のように当地に住み、一五歳になると日本に行くことになっている。宣教師の伝えるところでは、自分は中国服に身を纏い、宮殿に侵入し、

気付かれることなく王の部屋まで通り抜けて行ったが、その時王は鞠で遊んでいた、ということである。宮臣たちは宮殿に部外者がいることにすぐには気付かなかった。宣教師が見つけられた時、「宮臣たちは無礼な訪問者を叩頭して取り囲み、お帰りは、ほらッ、あちらですと教えた⁽⁶³⁾」。

沖縄島の言語状況をポシエツトは次のように特徴づけている。「琉球語は日本語の方言である。政府の言葉は中国語である。民衆から出来るだけのごとを隠すためである⁽⁶⁴⁾」。ゴンチャロフは宣教師の意見として次のように伝えている。「彼らの言葉は：日本語に近く、方言の一部であるように思う⁽⁶⁵⁾。琉球人と日本人は互いに言葉が通じ合っており、彼らは親類と考えるのが一番近い⁽⁶⁶⁾」。

同様にゴンチャロフは次のように記している、「琉球人は、日本人、中国人、朝鮮人のいずれにも起源しない。彼らの存在に中国人が関与していなかったことは、一目瞭然である。朝鮮人はまだ見たことがないので、彼らに琉球人との共通性があるのかどうかについて、私は分からない。琉球人の目は大きく、中国人のように角張っていない、また、顔は均整の取れた楕円形で、頬骨は突き出していない⁽⁶⁷⁾」。

この点に関してポシエツトは、二月三（一五）日の手記の中で、琉球人の「鼻は小さく、頬骨は突き出ており、額は広くなく、頬は平らである⁽⁶⁸⁾」とのメモを残している。

ポシエツトによれば、島には「浅瀬や灌木の茂みにサギ、野生の鴨【*Ytok rukku*】が多数いる…。人口は多い。小道には石が敷き詰めてある。

藁葺きの小屋の周囲に竹垣がめぐらされている。⁽⁶⁹⁾

ゴンチャロフは現地民の住居についてより詳細に描写している。「珊瑚で作られたこれらの垣を眺めると、その向こうには同じようにがっしりとした石造りの家が隠れているように思うかもしれないが、およそそうではなく、そこにつつましく立っているのは、瓦葺きのおもちゃのような小さな家、あるいは、藁葺きで、細い木を竹で編んだ壁が三方にあるだけのないみすばらしい家畜小屋のようなあばら屋である。家の一方は開いてあって、必要な場合は、硝子がないので紙を貼った枠で塞ぐのである。⁽⁷⁰⁾これは裕福な家の場合で、あばら屋では塞ぐような作りにはなっていない」。

著作の別の箇所で作家ゴンチャロフは、茅屋がなぜがっしりとした垣で囲まれているのかについて、その理由を次のように説明している。「山のあたりから茅屋が続いていて、まるでおもちゃのようだ。残念なことに、それらは垣の向こうに隠れている。しかし、そうでなければ駄目なのだ。琉球も、暴風、別の言い方をすれば台風の範囲に入っているのがっしりとした囲いの陰になければ、小鳥籠に似たこれらの家はごみか何かのように一掃されてしまう」。⁽⁷¹⁾

二月三日（一五）日

ポシエツトがゴンチャロフと共に、プチャーチンに同行して、宣教師の家を訪れた。コンスタンチン・ニコラエヴィチ【ポシエツト】は、宣教師の住まいはみすばらしいが、庭には素晴らしいバナナの木が生えていると手帳に簡単に記している。とはいえ、聖職者の家には島で唯一の硝子の窓が二つ付いた書斎があった。硝子窓はペリーが宣教師に贈ったものである。宣教師は、同じくペリー提督からの贈り物である大きな銀杯を見せた。⁽⁷²⁾

この日の会見にゴンチャロフも同席していた。彼はこの時の訪問の様子をより詳細に描写している。

「宣教師は玄関口で我々を出迎え、部屋に通した。部屋は、琉球の一般の家と同様に窓枠に紙が貼ってある。本と手稿で一杯の宣教師の書斎だけは、大きくはないが硝子窓が付いていて、その硝子は合衆国人から宣教師に贈られたものと思われる。ドアの上方には、同じく合衆国人からのもう一つの贈り物である銀の花瓶があった。それ以外はすべてまさに簡素であった。粗末な造りの木の机、椅子も同様で、長椅子もそれら以上のものではなかった」。⁽⁷³⁾

「合衆国人」というのはペリー提督をいって他になく、ポシエツトは手帳の中でペリーの名をはっきりと記している。ゴンチャロフにとって同様に印象的だったのが、宣教師の庭のバナナの木であった。「いちばん良かったのは、庭全体に影を落としている玄関脇の素晴らしいバナナの木、および多くの灌木の茂みと花であった」と同時に、作家ゴンチャロフは、残念なこととして、「琉球には毒蛇がいる。宣教師は部屋で二匹捕まえたと言っていた」と記している。⁽⁷⁴⁾

畑で栽培されている主なものは、米、タロ芋、薩摩芋、小麦、および大豆、豌豆、大根である。樹木のうちポシエツトが注目しているのは、ヒマヤスギ、マホガニー、バナナが自生していること、および棕櫚と椰子である。また「バナナ、煙草、茶がある」。⁽⁷⁵⁾

一方ゴンチャロフは樹木について次のように記している。「ガジュマルの木のほか、高さとしが美しが見事な太い木があり、日本人はその繊維から書き物をする紙を作っている。そして様々な種類のミルテ。庭で時折見られるのが、実の付いた椰子と棕櫚であるが、椰子はジャワおよびシンガポールで我々が目にしたものに比べるとみすばらしく思えた。おそらく椰子にとってここは気温が低いのであろう、葉がまばらで小さ

い」。

さらに作家は次のように書いている。この時期「畑のあちこちで人々が作業をしており、田植え、あるいはジャガイモ、キャベツその他の取り入れをしていた。これらすべてが、平和、穏やかさ、心地よい労働、豊かさの彩りに静かに包まれており、長く、困難で、最後には危険でもあった航海を経てきた私にとっては、この地は最も魅力的で安らぎを与えてくれるところに思えた」。

この日ポシエットは同僚と一緒に島の子供たちに英語を教えた。「アメリカの士官にスペイン銀貨を中国の手形【peki】に換えてもらい、それらを男の子たちに投げ与え、この先生の助けを得て、How do you do をはつきりと繰り返して子供たちに覚えさせた」。

二月四（一六）日。

ポシエットは、外国の新聞を読んで、黒海情勢、ロシアとトルコ、イギリス、フランスとの関係の進展を注意深く追った。彼の手帳には、彼が読んで比較し、欧州情勢の客観的な構図を再現しようと試みた西欧の新聞と雑誌の名前が記されている。分析を行った後彼はその総括としてこの日の手帳に、「英仏は一見和平に向け奔走しているように見えるが、実際はトルコ人をけしかけている」と書いている。

当時の西欧の定期刊行物の紙面にロシアに関していかに非客観的な情報がか載っていたかは、この時期（一八五三年一二月後半から一八五四年一月初め）、ラテン・アメリカにいたフリゲート艦ディアナ号艦長のステパン・ステパノヴィチ・レソフスキー海軍少佐（二八一七—一八八四）の発言から明らかである。レソフスキーは私的書簡の中で次のように憤懣を述べている、「新聞はひどい戯言を書き立てている【nopti】。…私が聞いた話では、あるフランスの雑誌に次のような記事があったとのこ

とである。それによれば、ナヒーモフ分艦隊がトルコのフリゲート艦を奪取した後、同部隊の士官が唯一生き残っていたトルコ人を滅多斬りにし、その肉を一切れ切り取って食べ、その功に対して皇帝からゲオルギー勳章をもらったというのである。このようなくだらないことでも我々はそれが本当かどうかを確かめざるを得ないのだ」。

ポシエットは二月四（一六）日の手帳の中で、怪我をしたために島をより活動的に見聞することができないことを悔しがっている。「足を挫いたので三日間フリゲート艦の中に留まっていた」。

この日は日曜日だったので二人の宣教師はプチャーチンから午餐に招かれた。更に、プチャーチン提督の要請に応じてナパキヤングの領主【ryčepnarop Hanakajine】が「黄色い琉球舟に乗り、従者六人と共に」やって来た。もう一隻のより小さな舟でピローグが運ばれてきたが、それは、ポシエットによれば、生焼けのパンのようなものであった。一方 I・A・ゴンチャロフが記したところによれば、領主が提督に贈ったのは「何かタルトのようなもの二つであった。一方、領主には、大きなサモワールと硝子の食器が贈呈された。また以前には、送られてきた家畜と野菜のお礼として長着用の羅紗を送っている」。「皇帝への報告書」の中でプチャーチンは彼のことを「町の支配者」と名付けている。提督との会話の中で領主は次に明言した。「琉球は日本にはなく、中国に従属している。琉球人は一般に貧しく、米を食しているのは富んだ者だけである。塩は少ない」。領主を音楽で送った。

ゴンチャロフは、当地の権力者たち【подарившими мечтахъ внакрей】は日本への従属を否定し、中国への従属ということを言っているとし、これについて次のように言及している。「彼らがそう言っているのは日本人に唆されたことと思われるが、もしかしたら、アメリカ人およびヨーロッパ人と日本人との間に軋轢が生じているとアメリカ

人から聞き、アメリカ人およびヨーロッパ人のいずれをも敵に回さないために、日本人とは予め関係を切っているのかも知れない⁽⁸⁵⁾。

プチャーチンは領主に対し、ロシア艦船がもし当地にやって来た場合には助力と厚遇を賜ると同時に交易関係を取り結んで欲しいと言った。しかし、領主は肯定的な答を避けた。

宣教師たちの言うところでは、領主は「数多くいる日本のスパイ」の影響力を恐れていた⁽⁸⁶⁾。宣教師たちはまた、琉球は中国に従属しているという領主の言を否定した。中でも彼らは、「最近八年間は中国との往来は全くなかった」と明言した⁽⁸⁷⁾。琉球人は、通常の商品のみならず「書籍もすべて日本から受け取っている。しかし読書はあまりせず、専ら煙草と酒に耽っている」⁽⁸⁸⁾。

ポシエツトは、裕福な琉球人が外出する際には「大抵の場合お付きが食べ物を入れた箱を持って後に続く」という興味深い特徴的な事象を記している⁽⁸⁹⁾。土地の住民たちがヨーロッパ人を見ると逃げる、あるいは隠れるのは何故なのかとロシア人が領主に聞いたところ、領主は次のように答えた。「住民たちが逃げるのは島にヨーロッパ人が立ち寄ることが稀なためで、ヨーロッパ人を目の当たりにすることに慣れていないからである。それに、以前ここに来たアメリカ人は時折畑から豌豆や大豆を取ったことがあり、しかも、一人あるいは数人ならまだしも、皆が…。それを聞いた我々は領主に対し、我が方の人間は何にも手を触れることはしないと確約した⁽⁹⁰⁾」。

ゴンチャロフは、ロシア人の突然の出現に対する土地の住民の反応を次のように描写してある。

「丈が短く体にびったりとした服を身に纏い、巨大なガジュマルの樹の下を足早に大きな足音を響かせて歩く自分や仲間たちの姿は、我ながら奇妙であった。当地の馬は小型で姿の良い馬であるが、ヨーロッパ人

を見るのに慣れておらず、我々に出会うと驚き、後ろ脚で地面を蹴って慌てて脇によけるのであった。馬の引き手は我々を見かけると馬の目を藁帽子で覆い、足早に通り通り過ぎていった。出会った女性たちも、後ろ足で地面を蹴りはしないが、顔を隠し、間に合えば同じように脇によけるのであった。ただ、十三歳くらいで想像以上に器量の良い女の子だけは、庭から道に出てきて、勇敢にも好奇心をもって、腕白な子供たちのように目を見開いて我々を見ていた⁽⁹¹⁾」。

住民のこのような行動は土地の支配者からの次のような命令によって説明できる。

「…野蛮人に対して執拗な興味を示すような行為は慎むべきである。もし野蛮人と遭遇するようなことがあった場合は、平民は道の片方に寄り、彼らの傍を静かに通り過ぎ、邪魔にならないよう行動すべし。また平民は、恐れていることと同時に驚きを相手にみせることが不可欠である。この命令は住民の一人一人に周知されるべきものであり、これに従わない者は罰せられることは必定である。このことを各住民はしかと心得るべきである。この命令が遵守されているかどうかの監督は役人が行うものとする。本命令は個々の役人すべてに通達される⁽⁹²⁾」。

二月五(一七)日付のポシエツトの手帳には記述がなされていない。足の怪我のため岸に上がることが出来ず、フリゲート艦内では特筆すべきことは特に何も起こらなかった可能性もある。二月一六(二八)日(マニラ出港の日)から二月二七日(三月一日)(フリゲート艦がサントドミンゴに到着した日)まで、彼が手帳に何も記入していないのもおそらく同様の理由によるものと思われる。

二月八(二〇)日。「スクーター船はボロジノの二つの島の調査【*lookorp*】に出掛けた。コルベット艦と輸送船は引き続きマニラに向けて出発した。フリゲート艦は注文してあった木材二本の到着を待つて

いる⁽⁹³⁾。木材はマストの修理用である。フリゲート艦パルラダ号より出された要請に従って島の支配者から木材二本、それぞれ直径一五一・五cm、二四二・四cm、長さ一六・二九m、三・六二mが供与された⁽⁹⁴⁾。この日ポシエットは一人の見回りの役人【полицейский служащий】と知り合いになった。「好奇心豊かな老人」であるその役人は、持てる地理の知識を披露し、地球儀の上でロシア、アメリカ、琉球の位置を示すことが出来た。ポシエットはフロックコートのボタンを二つ外して彼に贈った⁽⁹⁵⁾。

二月九(二二)日の手帳に短いメモが残されているが、文字が部分的に摩耗しており、判読が困難である⁽⁹⁶⁾。
続いて手帳に次のメモが残されている。

「二月二六(二八)日 午後一〇時、マニラ投錨地⁽⁹⁷⁾、町から三マイルのところ⁽⁹⁸⁾に投錨した」。

次のメモは日付部分は空いているが、二月二七日(三月一日)のもので、「二月二七日(三月一日)午後七時抜錨、マニラを後にした。フォアマストに亀裂が生じた。流れが強い……とあり、続けてほとんど間を置かず同じ頁に、「三月九(二二)日。サントドミンゴ湾に投錨⁽⁹⁹⁾」とある。

プチャーチン提督指揮下の艦隊の動きに関しては公式報告が『海軍雑誌』【Морской сборник】に掲載されており、それに従えば、スクーナー艦ヴォストーク号は、艦隊が沖繩島の投錨地に停泊している間「ボロジノ島の調査【осмотр】に派遣された。艦隊は二月一六(二八)日にマニラに無事到着し、スクーナー艦ヴォストーク号は調査した諸島の測量を終えた後、二月二三日(三月七日)に艦隊に合流した。マニラで「プチャーチン侍従武官長は、各艦に積める限りの量の食糧備蓄を準備し、それは別に輸送船メンシコフ公爵号に四ヶ月分の食料備蓄を積み込み、三月一日にマニラを出港する予定であった」⁽¹⁰⁰⁾。

以上見てきたように、海軍少佐ポシエットの手帳には、ロシア海軍艦船の沖繩島滞在についての特に新しい情報は含まれていない。しかしながら、新たに専門的運用に導入された文書史料は、本稿で扱った出来事についてより多くの具体的事実を取り込み、他の既に知られている史料と関連づけることを可能にさせてくれる。文書館史料を更に探索することにより、我々がまだ知らない史料が発見されるであろうことが期待される。

○参考文献

1. РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записная книжка Посыста № 7, 1854 г. Начало: 28 января/9 февраля 1854. Кончено: 11/23 марта 1854 г. На 61 листе.
2. Бондаренко Ю. Адмирал Посыст//Красная звезда. 9 февраля 2010 г.
3. Буров Д.М. Население Японии//Япония и ее обитатели. С приложением очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография Акционерного общества «Брокгаузъ—Ефронъ», 1904. С. 144-158.
4. Всеподданнейший отчет Генерал-Адъютанта Графа Пугачина о плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай 1852-1855 годов//Морской сборник. Том XXIV. № 10. Август, 1856. Часть II. СПб.: Типография Императорской Академии Наук, 1856. С. 22-104.
5. Выписка из письма Кап. Лейт. Лесовского, Командира фрегата Диана. Валларайзо, Мая 3/15 дня 1854/[Часть] III. Часть учено-литературная. Смесь. С. 67-72//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: типография Морского кадетского корпуса. 1854.
6. Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». Очерки путешествия. М.: Государственное издательство географической литературы, 1949.

7. Гончаров И.А. Через двадцать лет//Гончаров И.А. Собрание сочинений в шести томах. Т. 3. М.: Библиотека “Огонек”. Издательство “Правда”, 1972. С. 426-456.
8. Данилов А.М. Линейные корабли и фрегаты русского парусного флота. Минск: Амафрей, 1996. 384 с.
9. Движение судов. Отряд генерал-адъютанта Путятина/[Часть] II. Официальные статьи и известия. С. 68-69//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: Типография морского кадетского корпуса, 1854.
10. Заметки К. III. Поручика Елкина о гидрографических занятиях во время кругосветного плавания на фрегате «Диана», с 1853 по 1855 год//Морской сборник. Том XXIV. № 10. Август, 1856. Часть II. СПб.: Типография Императорской Академии Наук, 1856. С. 105-131.
11. Известия о плавании фрегата Диана, от 9 Мая, от 15 Мая/II. Официальные статьи и известия. С. 235-237//Морской сборник. Т. XII. № 8. Август. Санкт-Петербург: Типография Императорской Академии наук и Морского кадетского корпуса, 1854.
12. Извлечения из писем морских офицеров: Зарубина, Пещурова и Болгина, находящихся на Эскадре Путятина.—Нагасаки 18/30 Января 1854 года//III. Часть учено-литературная. Смесь. С. 319-332//Морской сборник. Т. XII. № 7. Июль. Санкт-Петербург: Типография Морского кадетского корпуса, 1854.
13. Каврайский Ю. Адмирал Посыет//Морская газета. 25 июля 2008 г.
14. Кронштадтский вестник, 1873 г., № 11, 24 января (5 февраля).
15. Маранджян К.Г. “Евангелие от Луки” из собрания ИВР РАН// Локальное наследие и глобальная перспектива. “Традиционализм” и “революционизм” на Востоке. XXVII Международная научная конференция по источноковедению и историографии стран Азии и Африки, 24-26 апреля 2013г.: Тезисы докладов. СПб.: Восточный факультет СПбГУ, 2013. С. 171.
16. Муравейский С.Д. И.А. Гончаров и его плавание на фрегате «Паллада», вступительная статья//Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». Очерки путешествия. М.: Государственное Издательство географической литературы. С. 3-60.
17. Накамура Ёсикадзу. И.А. Гончаров у японцев//Незримые мосты через Японское море. История и литература в поле русско-японских взаимодействий, СПб., 2003. С. 34-43.
18. Общий флотский список. Особы состоящие в Морском ведомстве. Санкт-Петербург: Типография морского министерства, 1876.
19. Пустовой Е.В. Русские корабли на Рюкю в 1854 г. Владивосток: «Русский Остров», 2013. 160 с.
20. Ранцов В.Д. Исторический очерк Японии//Япония и ее обитатели. С приложением очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография Акционерного общества «Брокгауз–Ефрон», 1904. С. 27-108.
21. Савада К. Гончаров в Японии. Japanese Slavic and East European Studies. Vol. 4. Kyoto, 1983. С. 95-109.
22. Файнберг Э.Д. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М.: Издательство восточной литературы, 1960. 314 с.
23. Черевко К.Е. Россия на рубежах Японии, Китая и США (2-я половина XVII-начала XXI века). М.: Институт русской цивилизации, 2010.
24. Шиглов Д.Н. Государственные деятели Российской империи 1802-

1917. Главы высших и центральных учреждений 1802-1917. Библиографический справочник. Издание второе исправленное и дополненное. СПб.: Изд-во «Дмитрий Буланин», 2002. С. 605-606.
25. Шмидт П.Ю. Природа Японии//Япония и ее обитатели. С приложением очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография Акционерного общества «Брокгауз-Ефронъ», 1904. С. 1-27.
26. Экспедиция Коммодора Перри в Японию//III. Часть учебно-литературная. Смесь и разные известия. С. 393-397//Морской сборник. Т. XII. № 8. Август. Санкт-Петербург: Типография Императорской Академии наук и Морского кадетского корпуса, 1854.
27. 川路聖謨『長崎日記・下田日記』【藤井貞文・川田貞夫校注 平凡社】東洋文庫, 第一二四巻, 一九六八年。
28. 古賀謹一郎『西使日記』(『大日本古文書 幕末外国関係文書』付録之一 一九一三年【所収】)
29. 中村喜和「幕末期日露交流の一面 コンチャロフが見た日本人と日本人の見たコンチャロフ」【一橋大学語学研究室『言語文化』一九九四年、第三一号】三一―五頁。
30. Lensen G.A. Russia's Japan Expedition of 1852-1855. Gainesville: University of Florida Press, 1955. 208 p.
- 附録一
 コンスタンチン・ニコラエウイチ・ホシェットの主要業績^(脚)
1. Артиллерийское учение. СПб., 1847.
 2. Вооружение военных судов. СПб., 1849 (в 1851 г. монография удостоена Демидовской премией Императорской Академии наук).
 3. Прибор для сосредоточения выстрелов//Морской сборник. 1849. № 1 (совместно с А.А. Поповым).
 4. Несколько слов о турецком флоте (из писем морского офицера)// Морской сборник. 1851. № 4.
 5. Состояние испанского королевского флота//Морской сборник. 1852. № 1.
 6. Результаты опытов над железом для определения разрушения, производимого в него ядрами//Морской сборник. 1852. № 7.
 7. О плавании фрегата «Паллада» из Англии на мыс Доброй Надежды и в Зондский пролив в 1853 г. (Из письма капитан-лейтенанта К.Н. Посьета)//Морской сборник. 1853. № 9.
 8. Испытания железных станков изобретения вице-адмирала Шанца и тигулярного советника Андреева//Морской сборник. 1858. № 4.
 9. Об испытании станков 30-и 60-фунтовых пушек, произведенном на корабле «Проход» в 1857 г.//Морской сборник. 1859. № 9.
 10. Рапорт Его Императорскому Высочеству Генерал-адмиралу вице-адмирала Посьета [о крушении фрегата «Александр Невский»]// Морской сборник. 1868. № 11.
 11. Извлечения из рапортов генерал-адъютанта Посьета Его Императорскому Высочеству Генерал-адмиралу о плавании в Великим Князем Алексеем Александровичем из Архангельска к Новой Земле, затем к о. Исландии и обратно в Кронштадт (в 1870 г.)// Морской сборник. 1870. № 9, № 10.
 12. Рапорт генерал-адъютанта Посьета Его Императорскому Высочеству Генерал-адмиралу от 27. 10. 1870 г. [о плавании к Архангельску, Новой Земле и о. Исландии]//Морской сборник. 1871. № 2 и отдельный оттиск: Извлечения из рапортов начальника

- практической эскадры генерал-адъютанта Посыета. В плавании в 1871-1872 г. к берегам Северной Америки, затем в Тихом океане// Морской сборник. 1872. № 2, 5, 8, 9, 12, 1873. № 2, 4-8.
13. По поволу назначения генерал-адъютанта Посыета министром путей сообщения//Вюллетень Ведомости. 1874. № 191.
14. Обзорные Марининского военного пути г. министром путей сообщения генерал-адъютантом К.Н. Посыетом. [В сентябре 1875 г.]. Петрозаводск, 1875.
15. Министр путей сообщения генерал-адъютант К.Н. Посыет//Вил. 1875. № 316.
16. К.Н. Посыет//Газ. А. Гапука. 1875. № 35.
17. К.Н. Посыет//Кругозор. 1876. № 26. С. 420 (портрет). Служба адмирала К.. Посыета в морском ведомстве//Правительственный Вестник. 1886. № 278 и отдельный оттиск.
18. Адреса разным лицам... Рига, 1886.
19. Празднование 50-летия службы в официальных чинах министра путей сообщения генерал-адъютанта адмирала К.Н. Посыета. Отчет юбилейной комиссии. СПб., 1887.
20. Прекращение связи в Сибирь. Записка генерал-адъютанта К.Н. Посыета//РС. 1889. №7.
21. Исследование причины крушения Императорского поезда 17.10.1888 г. на Курско-Харьковско-Азовской железной дороге. СПб., 1902 (литогр.).
22. Ермаков И.И. Адмирал Посыет почетный гражданин Тюмени// Архив Урала. 1995, № 2.
23. Некролог: Спасение на водах (Экстренный номер). СПб., 1899.

○附録二
目録

帝国科学アカデミーに移管された侍従武官長、故コンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエツト提督収集の書籍と地図。(Протокол общесообрания, 4 сентября 1899 параграф 103)。

A. 日本語文献【()内、文献に対するクリモフ注】

1. 『國華餘芳』(The book containing copies of antiques, stored as treasures in Shosowin, the imperial treasurehouse at Nagra) 一
- 1
2. 『朝陽閣鑒賞』(日本の布地見本帖) 一一一
3. 『和漢年歴箋大成』(中日年代記) 一一一
4. 『皇和魚譜』(日本魚類学) 一一一
5. 『繪本龍之都』(日本の魚と蝦の繪本)
6. (様々な場合の書簡挨拶文例集) 一一一
7. a) 『近世史略』三
b) 『海軍兵學寮規則』一一一
c) 『海軍省總人員概表』 d) 『艦船明細票』(表二枚)
8. a) 『新縣圖譜』 b) 『長崎港全圖』 c) 『銅判大東寶艦』 d) 『萬壽御江戸繪圖』(日本地図)
9. 魯西亞單語篇』(長崎で発行されたロシア語綴入門書) 一一一
10. 『海軍歴史』(日本語著作) 九一一
11. 『陸軍歴史』(日本語著作。洋綴本) 二
12. 『大日本貨幣精圖』(日本貨幣の図) 一一一
13. 『大禮服制汎則』(一八七三年以降の日本の軍服) 一一一

B. 中国語文献

- 14 『袖珍爵秩全函』(中国の暦)六一
- 15 『金屋型儀』『福世律梁』『開煤要法』(中国語の書籍三冊)
- 16 (わら半紙に書かれたアルバム二冊、題名なし)二一一
- 17 『華英通用雑話』(Chinese and English Vocabulary. Part first.)
一一一

C. ロシア語文献

- 18 Дневник поездки в Тянь-Шань. СПб. 1874.
- 19 Тянь-Вань-Гэ. Китайская ода времен династии Тянь. СПб. 1874.
- 20 Путилю. Опыт Русско-корейского словаря. СПб. 1874.
- 21 Пьянков. Корейская азбука. СПб. 1874.
- 22 Орлов. Грамматика маньчжурского языка. СПб. 1873.
- 23 Гошкевич. Японско-русский словарь. [СПб. 1867] [23-го июня 1899 года. A.]

○附録三

コンスタンチン・ニコラエヴィチ・ポシエットの略歴

海軍歴は一八三五年から。一八三六年士官、一八六一年四月二三日海軍少将、一八六六年一〇月二八日侍従武官長、一八六八年一月一日海軍中將。

主な受勲は以下の通り。

一八六四年聖アンナ勲章。

一八五〇年(上納された著作『軍艦の武装【«Вооружение военных судов»】に対し)皇帝ニコライ一世およびコンスタン・

ニコラエヴィチ大公よりダイヤモンドの指輪を下賜される。

- | | |
|-------|---|
| 一八五四年 | 一五年間の模範的勤務に対する勲功章。 |
| 一八五五年 | 聖ウラジーミル四等勲章。 |
| 一八五六年 | 一八五三年から一八五六年の戦争従軍記念の青銅メダルを下賜される。 |
| 一八五七年 | アンナ二等勲章(対日条約での功績に対して)。 |
| 一八五九年 | 二〇年間勤続模範的勤務に対する勲功章。 |
| 一八六三年 | 聖スタニスラフ三等勲章。一八六四年カフカース制圧記念十字勲章。 |
| 一八六五年 | 聖スタニスラフ一等勲章。 |
| 一八六九年 | 王冠附聖アンナ一等勲章。 |
| 一八七〇年 | ダイヤモンド飾りと皇帝の肖像画附のタバコ入れを下賜される。 |
| 一八七三年 | 聖ウラジーミル二等勲章。 |
| 一八七五年 | ダイヤモンド飾りと皇帝の肖像画附の金のタバコ入れを下賜される(アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ大公の成人記念)。 |
| 一八八〇年 | 聖アレクサンドル・ネフスキー勲章。 |
| 一八八三年 | 聖ウラジーミル一等勲章。モスクワのキリスト復活大聖堂完成・聖化記念メダル。 |
| 一八八六年 | 聖アレクサンドル・ネフスキー勲章に付ける海難救助協会【Общество спасения на водах】のダイヤモンド徽章(士官勲統五〇年記念)。 |
| 一八八八年 | 五〇年間勤続模範的勤務に対する勲功章、同年銀貨で年額四一九四ルーブル三五コペイカの終身年金を下賜され |

る。

外国の勲章も受章している。

一八六四年 プロシヤの星附王冠二等勲章。ヘッセンの星附リユド
 ヴイク勲章。ヴェルテンベルグの星附フリードリッヒ一
 等勲章。

一八六六年 ポルトガルの塔と剣二等勲章。オランダのダネブログ勲
 章。

一八六八年 トルコのメジイデイエ【Meljine】一等勲章。ギリ
 シヤの救世主一等勲章。ブラジルのキリスト一等勲章。

一八七九年 プロシヤの赤鷲勲章大十字章。

一八八〇年 ペルシヤの獅子と太陽一等勲章。モンテネグロのダニ
 ル公一世一等勲章。

一八八一年 日本の旭日一等勲章【勲一等旭日勲章】⁽¹⁶⁾。

以上の他にポシエットは、今日のロシア国旗に直接の関わりを持って
 いる。アレクサンドル三世はモスクワでの自身の戴冠式の際、クレムリ
 ンが白・黄・黒で飾られたのに対して、町は白・青・赤で飾られたこと
 に注意を向けた。コンスタン・ニコラエヴィチ【・ポシエット】を議長
 とする統一国旗選定委員会が創設された。E・V・プチャーチンはこれに
 関して次のように記している。「委員会の下した決定を以下のようなも
 のであった。『ピョートル大帝によって制定された白・青・赤の旗は二
 百年近くの歴史を持つ。この旗には紋章学的裏付けも認められる。すな
 わち、モスクワの紋章は、赤地に青いマントを纏った白い騎士を描いた
 ものである。最後に、この三色については海軍で用いられている旗もそ
 れを正当化する。一方、白・黄・黒の色は歴史的にも紋章学的にも根拠

を持たない』。ポシエット提督の委員会の決定に基づいて、白・青・赤
 の旗が国旗として皇帝により裁可された」。(翻訳・有泉和子)

〔注〕

- (1) 日付は文書史料に基づきユリウス暦【露暦】。
- (2) Черяко К.Е. Россия на рубежах Японии, Кипая и США (2-я половина XVIII-начала XXI века). М.: Институт русской цивилизации, 2010.
- (3) Файнбергер Э.Д. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М.: Издательство восточной литературы, 1960. С. 159.
- (4) Lensen G.A. Russia's Japan Expedition of 1852-1855. Gainesville: University of Florida Press, 1955. P. 68-69.
- (5) Пустовой Е.В. Русские корабли на Рокко в 1854 г. Владивосток: «Русский Остров», 2013.
- (6) 丸川ていせい「ただけ挙げ」。Накамура Ёсиказу【中村喜和】И.А. Гончаров у японцев/Незримые мосты через Японское море. История и литература в поле русско-японских воздействий, СПб., 2003. С. 34-43【初出は一九八八年。И. А. Гончаров у японцев//Литература и искусство в системе культуры. М., 1988. С. 411-420】。中村喜和「幕末期日露交流の一面 ゴンチャロフが見た日本人と日本人の見たゴンチャロフ」【一橋大学語学研究室『言語文化』1994, No. 31. pp. 3-15.初出ロシア語論文「И.А. Гончаров у японцев // Литература и искусство в системе культуры. М., 1988」に最小限の字句訂正を加え日本語に直したもの】。Савада К.【澤田和彦】Гончаров в Японии. Japanese Slavic and East European Studies. Vol. 4. Kyoto, 1983. С. 95-109.【日本スラヴ・東欧学会】
- (7) ロシアの文献では、一九〇四年でも那覇はまだ「ナバ」と呼ばれていた。しかし、島は既にポシエットの手帳にあるように大琉球島ではなく、沖縄島と名付けられている。那覇市の人口は一八九八年に三五四五三人であった(Бутов Д.М. Население Японии//Япония и ее обитатели. С приложением очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография

- Акционерного общества «Брокгауз-Ефронь», 1904. С. 148.) S・D・ト
 ヴェイスキーは那覇はロシア人に「ナバ」とか「ナフマ」と呼ばれてい
 た(指摘して) (Муравейский С. Д. И. А. Гончаров и его плавание на
 фрегате «Паллада», всеупителная статья//Гончаров И. А. Фрегат «Паллада».
 Очерки путешествия. М.: Государственное Издательство географической
 литературы, 1949. С. 44.)
- (8) Файнберг И. Я. Указ. соч. С. 170, 173-174.
- (9) Морской энциклопедический словарь в 3-х тт. Т. 2. СПб.: Судостроение,
 1993. С. 544-545.
- (10) Кронштадтский вестник. 1873 г., 24 января (5 февраля), № 11. С. 37-38.
- (11) ナントの勅令とは、一五九八年アンリ四世が出した信仰の自由を約束
 した勅令。一六八五年ルイ十四世がフォンテースブローの勅令で廃止し
 た。【フォンテースブローの勅令以降】宗教迫害が起り【むしろ特権の
 剥奪。宗教上の問題はかりではなく国際政治外交、経済上の問題。ユグノー
 は商工業者が多かった】、何十万人ものプロテスタントがオランダ、イギ
 リス、スイス、デンマーク、ロシア、さらにはアメリカに逃れた。
- (12) Бондаренко Ю. Адмирал Поветт/Красная звезда. 9 февраля 2010 г.
- (13) Там же.
- (14) フリゲート艦バルラダ号は五十二門砲。一八三二年一月二日サンク
 ト・ペテルブルクのオホーツク造船所で起工、一八三二年九月一日進水
 された。建艦責任者はV・F・ストーキー陸軍大佐。長さ五十二・七m、幅
 一三・三m。(Данглов А. М. Линейные корабли и фрегаты русского
 парусного флота. Минск: «Амалфея», 1996. С. 176-177.)
- (15) Всепоходнейший отчет генерал-адъютанта графа Е. В. Путятина о
 плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай. 1852-1855.
 Ноябрь. 1855-март. 1856 г. С.-Петербург. С. 42-43.
- (16) Там же. С. 60.
- (17) Шмидт П. Ю. Природа Японии//Япония и ее обитатели. С приложением
 очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография Акционерного
 общества «Брокгауз-Ефронь», 1904. С. 3.
- (18) Там же. С. 12.
- (19) Ранцов В. Л. Исторический очерк Японии/Япония и ее обитатели. С
 приложением очерка «Корея и корейцы». С.-Петербург: Типография
 Акционерного общества «Брокгауз-Ефронь», 1904. С. 84.
- (20) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 471.
- (21) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 465.
- (22) Всепоходнейший отчет генерал-адъютанта графа Е. В. Путятина о
 плавании отряда военных судов наших в Японию и Китай. 1852-1855.
 Ноябрь. 1855 - март. 1856 г. С.-Петербург. С. 61-62.
- (23) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Попова, № 7,
 1854 г. Л. 18.
- (24) Гончаров И. А. Через двадцать лет//Гончаров И. А. Собрание сочинений в
 шести томах. Т. 3. М.: Библиотека «Огонек». Издательство «Правда», 1972.
 С. 439.
- (25) 海軍サージェンはイギリスの度量衡の単位フィート(fathom)と関連し、
 海上での距離や水深の単位である。七フィートサージェン(一・八二九m)
 はロシアでは一五世紀から導入されたが、一九三二年に廃止された。【一
 海軍サージェンは一・八二九m。「サージェン」はメートル法施行前のロ
 シアの長さの単位だが、海上では一・八二九mであるのに対して、陸上で
 は約二・一三四m。1フィート＝三〇・四八cm】
- (26) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Попова, № 7,
 1854 г. Л. 22 об.
- (27) Пустовой Е. В. Русские корабли на Рюкю в 1854 г. Владивосток: «Русский
 Остров», 2013. С. 20-21.
- (28) Цит. по: Пустовой Е. В. Русские корабли на Рюкю в 1854 г. Владивосток:
 «Русский Остров», 2013. С. 23.
- (29) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 469.
- (30) Чончхаронは「の冊」の冊の「ナバ」あるいは「ナバキヤン」とも言
 う(「ナバキヤン」(Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 473.) 【以下、那覇の言ふ方
 について「ナバキヤン」】)

- (31) Вспомогательный отчет. С. 61.
- (32) Движение судов. Отряд генерал-адъютанта Пугачина[Часть] II. Оригинальные статьи и известия. С. 69//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: Типография морского кадетского корпуса, 1854.
- (33) おそらくボシエットは英国艦リラ号【スループ艦ライラ号艦長】で琉球を訪れたバシリ・ガリー(一七八八一—一八四四)【ヘイシル・ホール(Basil Hall)]を念頭におくことなる(Hall B. Account of a voyage of discovery to west coast of Cora. London, 1818)。だがホールが沖縄島を訪れたのは一八一六年である。
- (34) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвета, № 7, 1854 г. Л. 13.
- (35) Там же. Лл. 18—22 об.
- (36) Там же. Л. 23.
- (37) Там же. Л. 22 об.
- (38) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвета, № 7, 1854 г. Л. 22 об.
- (39) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 472.
- (40) Палкооровоとは帝政ロシアの首都の北郊外、今日のサンクト・ペテルブルグの北地区。
- (41) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 473.
- (42) Там же. С. 475-476.
- (43) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвета, № 7, 1854 г. Л. 23 об.
- (44) Там же 24 об.
- (45) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвета, № 7, 1854 г. Л. 24 об.
- (46) 斤は重さを計る単位、約六〇〇グラム。
- (47) Пустовой Е. В. Указ. соч. С. 41.
- (48) Там же. С. 50.
- (49) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 480.
- (50) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 480.
- (51) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвета, № 7, 1854 г. Л. 26.
- (52) Там же. Л. 26 об.
- (53) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 473.
- (54) Там же. 475.
- (55) 『四人の福音伝道者』は四つの正典福音書の著者、マタイ、ヨハネ、ルカ、マルコのことである。科学アカデミー東洋古籍文献研究所の古文書コレクションの中に『ルカ伝福音書』(路加伝福音書)の木版刷(整理番号C—16)がある。一九一〇年にI・A・コシケヴィチのコレクションから移管された。同研究所上席研究員K・G・マランチャンによれば、この木版刷は一八五五年に香港で印刷されたものである。琉球語への翻訳を為したのはVestmand Vettegeimである(K・G・マランチャンは「Betgelexhain」を転写している(Mаранджан K. Г. “Евангелие от Луки” из собрания ИВР РАН//Локальное наследие и глобальная перспектива. “Традиционализм” и “революционизм” на Востоке. XXVII Международная научная конференция по историко-культурному и историографическому стран Азии и Африки, 24-26 апреля 2013г.: Тезисы докладов. СПб.: Восточный факультет СПбГУ, 2013. С. 171)。上記論文をより詳しくしたものが『Евангелие от Луки』【ルカ伝福音書】として科学アカデミー東洋古籍文献研究所東洋古籍文献研究所論集『Страны и народы Востока』【『東洋の諸国と民族』】に今年掲載される予定。
- (56) 「ローマ人への手紙」はローマのキリスト教団信者たちに宛てた使徒パウロの書簡で、パウロの教えを簡略に述べたもの。
- (57) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 481.
- (58) フントはロシアの度量衡、量の単位、1フントは約四〇九・五一二四一g
- (59) 数字が正確に判読できたとはいえない。手帳は普通の鉛筆で、大抵の場合、急いで書かれており、鉛筆書きの文字は薄れ、時には完全に消えてしまっている場合もある。数字の四七ははっきりと読み取れるが、

- その次の文字はサイズが小さい。その字は数字の「2」にも取れるが、アルファベット文字に「r」「e」の筆記体とも取れ、*ゆら*にまた別の文字かもしれない。実際に「472 000 000 русских фунтов」と書かれてゐるとすれば、総量は米一九万三千二百トンと*ごうごん*になる。
- (60) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 27.
- (61) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 479.
- (62) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 478.
- (63) Там же. С. 479.
- (64) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 28.
- (65) Идиом【慣用句】「イデオムの意」*ごうごん*言葉は、*りゅう*は方言と*ごん*
*めい*と*ごん*。
- (66) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 479.
- (67) Там же. С. 479.
- (68) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 31.
- (69) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 29.
- (70) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 472.
- (71) Там же. С. 475.
- (72) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 30.
- (73) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 486.
- (74) Там же. С. 486.
- (75) タロイキはイモの一種「Colocasiaesculenta」
- (76) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 32 об.
- (77) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 474.
- (78) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 31.
- (67) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 33-33 об.
- (68) デイアナ号は五四門砲フリゲート艦。一八五二年五月二一日アルハンゲリスクで起工。一八五二年五月一九日進水。建艦責任者は F・T・サクリヤント陸軍大佐 (Данилов А. М. Линейные корабли и фрегаты русского парусного флота. Минск: Амафед, 1996. С. 182+183.)
- (68) Выписка из письма Кап. Лейт. Лесовского, Командира фрегата Диана. Валпарайзо, Мая 3/15 для 1854/ [Часть] III. Часть учено-литературная. Смес. С. 70//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: типография Морского кадетского корпуса. 1854.
- (68) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 487.
- (68) Всеподданнейший отчет. С. 192.
- (68) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 33 об—34 об.
- (68) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 479.
- (68) Всеподданнейший отчет. С. 192.
- (68) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 34 об.
- (68) Там же. Л. 34 об.
- (68) Там же. Л. 34 об.
- (68) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 487.
- (68) Гончаров И. А. Указ. соч., 1949. С. 474.
- (68) Пустовой Е. В. Указ. соч. С. 58-59.
- (68) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 35 об.
- (68) Пустовой Е. В. Русские корабли на Рюкю в 1854 г. Владивосток: «Русский Остров», 2013. С. 28.
- (68) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посвєта, № 7, 1854 г. Л. 36 об.

- (96) 二月九日、ロシア艦隊が沖縄島を出港したこの日、英仏はロシアと断交した。このことをロシア海軍軍人たちはまだ知らない。
- (97) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посыета, № 7, 1854 г. Д. 37-37 об.
- (98) Движение судов. Отряд генерал-адъютанта Пугачина/ [Часть] II. Официальные статьи и известия. С. 68–69//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: Типография морского кадетского корпуса, 1854.
- (99) マニラでロシア人海軍軍人たちは、英仏艦が複数黒海に進入し、戦争が不可避になったことを知った。
- (100) РГА ВМФ. Фонд 1247. Опись 1. Дело 12. Записные книжки Посыета, № 7, 1854 г. Д. 38.
- (101) Там же. Д. 39.
- (102) Движение судов. Отряд генерал-адъютанта Пугачина/ [Часть] II. Официальные статьи и известия. С. 69//Морской сборник. Т. XII. № 5. Май. Санкт-Петербург: Типография морского кадетского корпуса, 1854.
- (103) 主要業績の目録はD・N・シーロフの研究書に基づく。(Шиглов Д. Н. Государственные деятели Российской империи 1802-1917. Главы высших и центральных учреждений 1802-1917. Биобиблиографический справочник. Издание второе исправленное и дополненное. СПб.: Изд-во «Дмитрий Буланин», 2002. С. 605-606.)
- (104) 亡きK・N・ボッシュェットから科学アカデミーに移管された学術文献一覧は次の刊行物に従って引用したものである。Museum Asiatica. Petropolitani. Notitiae, II, III. Cuiusdam S. Salemann. Petropoli: Officina Typographica Academiae Saesatae Scientiarum, 1902. P. 076, 077.
- (105) Общий флотский список. Особы, состоящие в Морском ведомстве. Санкт-Петербург: Типография Морского Министерства, 1876. С. 47.